

Basilica Portiana の失われた記憶について

宮 坂 朋

はじめに

I. 概要

II. 研究史と展望

おわりに

はじめに

ミラノは紀元340年から402年までローマ帝国の首都であった¹⁾。モニュメンタルな建造物についての伝統がほとんど存在しなかったといつてよい。地方都市ミラノが、帝国の文化の発信地として機能し始めることとなったのである。成熟した地方様式のでき上がる以前のミラノの美術は、様々な様式および図像の伝統が交錯した様相を示す。転々とした宮廷の所在地に従って、工人たちも移動したからである。このようにして次第に帝国内では美術的「コイナー」が形成されていくこととなった。

この時期の、特に4世紀後半から5世紀初めのミラノの美術について考察する際、混在する様式に起因する年代決定の困難さがたえずつきまとう。いかなる伝統を背負った工人によって制作されたのか、明確な判断が下されることはまれであるといつてよい。これは携帯に適する規模のためにあらゆる場所に持ち運ばれ、ゆえに図像・様式の伝播に役だった工芸品に限らず、モニュメンタルな規模の作品についても同様である。ことテオドシウス朝美術に関する限り、地方様式という枠取りから美術作品を規定していくことはほとんど意味を持た



図1 サン・ロレンツォ・マッジョーレ聖堂外観

ないようにすら思われるのである。

ミラノのサン・ロレンツォ・マッジョーレ聖堂（図1）に附属するサンタク
イリーノ礼拝堂（以下SAと略記）のモザイク装飾についても同様な様式上の問
題が指摘されてきた。さらにこの礼拝堂の注文主および建物の目的についても、
文献によって明らかにされていないため、論争的となっている。SAは、いつ、
誰のために、いかなる目的で建立されたのか。この論文では、モザイク装飾の
図像プログラムについて考察する前段階として、これらの問題を明らかにする
ことを目的とする。

I. 概 要

複数の建物で構成されたサン・ロレンツォ・マッジョーレ聖堂（以下複合体
についてはSLC、四葉型の本堂についてSLと略記）は、ミラノからティキヌ
ム（現パヴィア）へ向かう街道沿いの城門からほど近い位置に建てられている

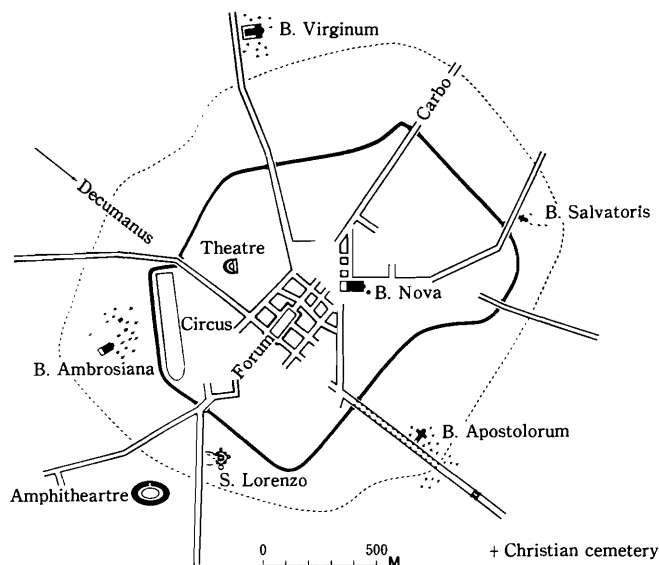


図2 ミラノ (Mediolanum) 地図：400年頃

(図2)。4世紀のミラノにおいて、城壁内の大聖堂(後に聖女テクラに捧げられた；ゴシック期に改築)、城壁外側の聖処女バシリカ(現サン・シンプリチアーノ聖堂)、使徒バシリカ(ロマネスク期に改修、現サン・ナザーロ聖堂)、殉教者バシリカ(ロマネスク期に改築、現サントンブロージョ聖堂)が、SLCとほぼ同時期に建築された。これらの聖堂はすべてアンブロシウスによって建てられているのに対して、SLCの建設事業に関しては、説教や書簡などのあらゆる著作において、まったく言及されておらず、別の創建者の存在を想定するべきように思われる。さらに、他の聖堂はすべて改築改修を経ているが、SLCのみ初期キリスト教建築の壮麗な原形をとどめる点においても特異である。

SLCは、四葉型プランのSLに3つの八角型プランの礼拝堂が附属する建築複合体である(図3)。本堂前方にはアトリウムが設けられ、さらにプロピラエウム(列柱廊)が置かれて、堂々たる外観を呈する。プロピラエウムは、高さ

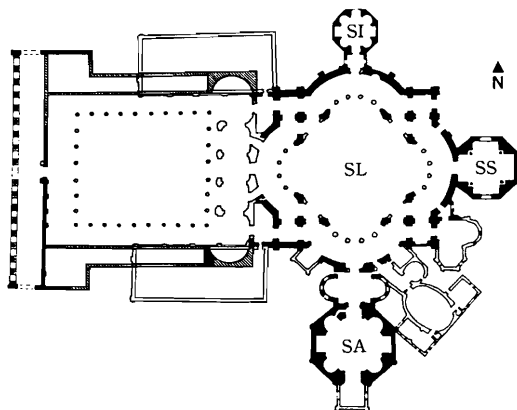


図3 サン・ロレンツォ・マッジョーレ聖堂プラン

8m ものコリント式の円柱16本より構成される。基台、円柱、柱頭、アーキトレーヴなどの部材は再利用によるものである。いずれもアントニヌス朝に特徴的な様式を示し、まだ十分使用可能であった同一の建物に使われていたと考えられる。1605年の修復事業の際、基礎部分に埋められていたのを発見され、付け柱にはめ込まれたルキウス・ヴェールスの銘文（CIL, V, 5805）もおそらく同一の建物に対する献堂銘であったことが推測されている²⁾。プロピラエウム中央には、アーチが立ち上がり、いわゆる fastigium (破風) を構成する。これは、すでに共和政後期に王威あるいは神威の表象として位置付けられていた構造体である。プロピラエウムを通り抜けると、次に広大なアトリウムが広がる。これは、25×28.50m という初期キリスト教聖堂では最大級の規模を持つ。城壁内部の宮廷からティキヌム街道（Via Ticinensis）を通して聖堂に向かう皇帝の行列が、プロピラエウム中央のアーチの下にとどまり、アトリウムで待ち構える民衆の歓呼を受ける、という儀礼のありさまを想像することは必ずしも突飛な⁴⁾ 思いつきではないように思われる。

SLC の基礎部分は付近の円形劇場の外周の切り石（円柱、柱頭、コーニスやフリーズなど彫刻の施された大きなブロックを含む）6,000個以上を使用してい

ることが発掘調査によって明らかになった。⁵⁾ 本来4世紀中には既存の建築物、特に公共建築物から部材を取り出して再利用することは稀であったが、古代の建物は緊急の事態や必要性に応じて皇帝の命のもとに解体されていった。さらに異教神殿の閉鎖令とともに、キリスト教聖堂建築の大義名文のもとに、公けに異教神殿が破壊されることとなる。このような再利用は5世紀初頭から大々的に行われるようになる。しかしながら、このことはSLの建設時期を限定するわけではないといえる。ミラノにおいて、劇場は4世紀末まで依然として使用されていたことが記録に残るが、これは必ずしもSLCの土台の石材を供給した円形劇場ではなく、木組みの借り小屋であった可能性も指摘されているからである。⁶⁾ これは半分解体された劇場で見世物が開催された⁸⁾と想像するよりも、より現実的な解釈であるように思われる。実際、アウソニウスはミラノに関する記述の中に円形劇場を加えていないので、彼がミラノを訪れた379年にはすでに完全に⁹⁾取り壊されていたとも考えられるからである。

このように徹底した基礎工事が必要となった背景には、水はけの悪い沼地であって、かなり急勾配の傾斜地でもあり、また小さな異教徒用墓地がすでに存在した、という三重に劣悪な立地条件があったことがすでに指摘されている。¹⁰⁾ 本来大規模な建築物にはふさわしい環境ではなかったにもかかわらず、この場所をわざわざ選択したのは、おそらく城壁に入ってすぐ、現在のサン・ジョルジョ・アル・パラッツォ（宮殿の聖ジョルジョ）聖堂の建つ位置に存在したと考えられるローマ皇帝の住居との関連からであろう。

このプラットフォームが敷かれているのは、四葉型のSLおよびSLの同じ軸線上のサンティッポリト礼拝堂(以下SIと略記)、南側のSAである。SAの土台は本堂とはやや離れるが、同じ石材が使用される。一方、北側のSSの土台は全く異なり、大きいブロックを全く含まない。このことから、SL-SI-SAは同一プロジェクトで施工されたのに対して、サン・シスト礼拝堂(以下SSと略記)のみ後の付加物である、という解釈がすでにカルデリーニによって提出さ

れている。¹¹⁾

この基礎の上に立ちあがる SL は、身廊の回りに2階建の側廊を巡らした巨大な集中式聖堂である。中央広間から半ドームのかかったエクセドラが4つ広がり、この核が外側で周歩廊とギャラリーで取り囲まれた、いわば二重の四葉型構造になっている。身廊の上には正方形のドラムを立ち上げ、その上にはペンデンティーフ・ドームかグロイン・ヴォールト、あるいは木骨天井がかけられていた。¹²⁾ 天井を支え、また、ギャラリーへの上り口ともなったのは、四隅に立つ4基の塔である。¹³⁾ このような塔は初期キリスト教時代の聖堂建築ではきわめて稀である。¹⁴⁾ 内壁はオプス・セクティレにより豪華な仕上げが施され、天井は金のモザイクで装飾されていた可能性がある (*intus alavariis lapidibus auroque tecta, aedita in turribus*)。

1071年と1595年の2回にわたって改修されているが、現在残る初期キリスト教時代に建造された部分は、周歩廊周壁の1階部分といくらかの2階部分、北東の塔の全長、北西と南西の塔の下部、2階の高さまでの十字型の角柱、4つのエクセドラの両端の複合角柱、アトリウムの壁体であることが、おもに16世紀の改修の責任者であったマルティーノ・バッシの残した記録文書から知られる。¹⁵⁾

この聖堂のモデルとなったのが、アンティオキアの黄金八角堂であることはすでに多くの研究者によって指摘された。¹⁶⁾ これは、327年にコンスタンティヌス帝によって開始され、341年に彼の息子コンスタンティウスによって完成された、宮殿附属聖堂であり、後のユスティニアヌス帝による、コンスタンティノポリスの聖セルギオス・カイ・バッコス聖堂や、ラヴェンナの聖ヴィターレ聖堂などの6世紀以降の東方で流行した全ての八角型プランの宮廷附属聖堂の原型となったものである。しかしながら、西方においては、この SL のみが現在まで伝わる唯一の例となっている。

この本堂に附属して3つの集中式礼拝堂が延びる。上記のように、SL、SI、

SA は同一の土台の上に構築された、ひとまとまりの建築群である。立ち上がる壁体もほぼ同じ工法で造られる。SI は十字架を内包する八角型プランの建物であり、霊廟所として構想されたことが推測される。これはおそらエウセビウス（426没）、テオドールス（489没）、ラウレンティウス I（510/12没）らのミラノ司教の墓所として使われた。SA はこれら 3 つの礼拝堂の中で最も大きく、保存状態も良好であり、天井にいたるまで初期キリスト教建築のオリジナルを見ることができる。またここにだけ前室が造られている事実も見逃せない。前室両端には半円形のアプシスに取り付けられる。このような前室は、4—5 世紀のローマの墓廟建築（サンティ・ピエトロ・エ・マルチェッリーノ聖堂、サンタ・コスタンツァ廟、サン・ピエトロ・イン・ヴァティカーノ聖堂、サン・セバ스티アーノ聖堂）および洗礼堂（サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ）に頻繁に現われるものであり、ここではローマ建築の先例が模倣されている可能性も考えられる。¹⁷⁾ この前室にはモザイクが部分的に残る。また、八角型への入口には、ブットー（童子）の競技場面の浮き彫りされた再利用の白大理石板（1 世紀の作）が取り付けられている。

SA のプランは、初期キリスト教時代に好まれた八角型である。8 という数字は異教的古代より崇められた数字であったが、キリスト教においても、キリストの復活やキリスト自身を表すものとして神聖視されたのである。¹⁸⁾ この八角堂内部には、矩形と半円型のニッチが交互に置かれる。これら 8 つのニッチの上には 2 階ギャラリーがしつらえられ、八角型の各辺に切り取られた大きな窓の前をめぐっている。武骨な煉瓦造りの外装は SA の豪華な内部装飾と好対照をなしていた。SL 本堂主祭壇の装飾に使われるために、16 世紀の改修時に剝がされてしまったが、それまで SA 内部は通例皇族専用の材料である、紫斑岩の化粧板で覆われ（TVTO DI PORFIDO）、また、金のテッセラを多用した目も眩むばかりの色彩のモザイクで装飾されていたのである。本来 4 つあるアプシス・コンクのモザイクのうち、2 つのみ残る。それらの主題は「エリヤの昇天」（図



図4 サンタキリーノ礼拝堂アプシス・モザイク 「エリヤの昇天」



図5 サンタキリーノ礼拝堂アプシス・モザイク 「キリストと十二使徒」

4)と「キリストと12使徒」(図5)である。2階ギャラリー壁面にはフレスコ技法で偽オプス・セクティレが描かれている。また、一カ所から十字架を持ち、マントを翻す人物像のシノピアが発見された。一方、SSは6世紀におけるSAのプランの明らかな模倣である。

この聖堂の現在の名称は、ローマの殉教聖人聖ラウレンティウスに因んでいる。しかしながら、聖ラウレンティウスの聖堂として、はじめて文献に現われるのは590年頃になってからである。¹⁹⁾ミラノ司教ラウレンティウス一世(510/512年没)は自身の霊名の主である聖ラウレンティウスとともに殉教した、ローマ教皇シクストゥス二世を記念して、SSを建設している。²⁰⁾SIは、やはり聖ラウレンティウスゆかりの聖ヒッポリトゥスに献堂された。一方、SAはそれ以前はアルルの聖ゲネシウスに捧げられていたのだが、15世紀になって、1000年ごろの地方聖人である聖アクィリーヌスの首のない遺体が運び込まれ、礼拝堂にこの聖人の名が冠せられるようになった。建築構造上明らかに初期キリスト教時代の様式的特徴を示すSAは、これらの聖人のために建てられたわけではないことは自明である。執りなしを願いつつ、聖人の墓の近くに葬られようと願った平信徒の墓も周辺に設けられることもなく、またいかなる聖遺物も初期には持ち込まれた記録がないことから、SAが殉教者礼拝堂として構想されたのではないことは言うまでもない。

II. 研究史と展望

SAの建築およびモザイク研究は1940年、シュステル枢機卿によって着手されたといえる。²¹⁾彼は、八角堂を洗礼堂と考えており、この八角堂と前室のモザイクについて、4世紀という年代決定を下している。カルデリーニ、キエリチ、チェッケッリにより、はじめての本格的なモノグラフが出版されたのは、1951年のことである。²²⁾1910/11年および1930年代の発掘成果を踏まえたこの著作は、SLCの建築および装飾に関する総合的かつ基本的な研究書である。この本の中

でSLの建築年代は370年ごろとされ、全体の相対的な建築順序(1. SL-SI-アトリウム-プロピラエウム、2. SA、3. SS)が初めて提出された。また、この聖堂は有名なバシリカ・ポルティアーナとして位置付けられている。これはアリウス派の皇帝の命によって建設された宮廷礼拝堂であり、まさしくここで²³⁾アンプロシウスとアリウス派の論争が行われたのである。SAのモザイクの制作年代については、チェッケッリは、八角堂に360-370年、前室は374-397年としている。

この著作に対する書評においてグラバル²⁴⁾は、SLの建築時期はあくまで5世紀に入ってからであるとする。まず、この四葉型とは、5-6世紀のシリアで流行したプランであることから、4世紀という年代は早すぎるとする。実際にもし4世紀という年代決定を受け入れるならば、西方で最初のキリスト教建造物となる。チェッケッリの説に従えば、シリストラ出身のアリウス派司教アウクセンティウスの座として大聖堂の機能をもあわせ持つはずなのであるが、グラバルは本堂の四葉型プランは、その機能にふさわしくない形体であるとする。改めて言うまでもなく、集中式プランは、実際に殉教者礼拝堂あるいは洗礼堂にもっぱら採用された。さらに、文献に一切出てこないこと、城壁の外側という位置などからも、殉教者礼拝堂説を主張している。グラバルによると、5世紀初めのローマにおいて、ヴィターリス、ゲルヴァシウス、プロタシウスといったミラノの地方聖人をまつる礼拝堂が建立されている以上、ミラノにおいてもまた、ローマの殉教聖人記念堂が造られて何の不思議もないということになる。また、モザイクに関しても、5世紀のラヴェンナ、ローマ、テッサロニキの作品あるいは同じミラノのサン・ヴィットーレ・イン・チエルドーロ礼拝堂のモザイクの様式・図像と関係づけている。

一方、このグラバルの論考と対照的に、トラヴェルシ²⁵⁾はローマの伝統との強い結び付きを強調する。特にSAのモザイク装飾は、様式的にも図像的にも3-4世紀のカタコンベの墓室内部壁面を装飾したフレスコ画と比較している点

が興味深い。

クラインパウアーは1968年の論文において、おもに建築的観点から画期的な考察を行った。²⁶⁾クラインパウアーによると、サン・ロレンツォ聖堂のクロノロジーは次のようである：

1. SL 土台の設置
2. SA の第一プロジェクトの土台の設置
3. 本堂上部壁体
4. SA の第一プロジェクトの放棄と第一土台の上に第二プロジェクトの建設
5. SA 八角堂および前室の上部壁体同時建設

1—4まではアンプロシウス司教就任以前とし、特に1と2はほぼ同時期、3と4は逆の順番かあるいは、同時である可能性も示唆する。つまり、ミラノの建築はアンプロシウス時代以前と以後では明らかに変化する。SL本堂はその壁体において、精緻な造り、厚い煉瓦と薄いモルタルの配分の規則（モドゥロ）、およびオプス・スピカートゥム（綾杉文状に煉瓦を並べ、より多くモルタルを使用することで、高価な煉瓦を節約する工法でもある）の欠如から、アリウス派司教アウクセンティウス（355-373年在位）時代に建てられたとする。一方、SAの壁体はより経済的な工法で造られており、おそらくアンプロシウスの在位期間（374-397年）の初期に、サン・シンプリチャーノ聖堂、サン・ナザーロ聖堂、サンタンブロージョ聖堂に先立って建築されたと考えられている。装飾（モザイク、コリント式柱頭、ストゥッコ細工）はやや遅れ、380年代に付け加えられたという説を彼は唱える。これは年代決定に関する初めての客観的な切り口であったといえる。

ボヴィーニは1970年の論文において、SAモザイクについて詳述する。²⁷⁾彼の様式分析に従うならば、前室と八角堂のモザイクは4世紀末から5世紀はじめに

かけて、同時に制作された。グラバルへの反論として、SA はむしろラヴェンナのガラ・プラキディア廟やミラノのサン・ヴィットーレ・イン・チエルドーロ礼拝堂などの作品の源流となるものであるとし、SAの方がより古代的な性格を示すと考えている。ボヴィーニはSAのモザイクを4世紀の作品、特にカタコンベ壁画や市門型石棺彫刻と比較し、よりSAの様式的図像的特徴を浮き彫りする結果となっている。しかしながら、SAモザイクの図像プログラムを構想するまでには至らなかった。また、クラインバウアーによる先行論文を踏まえておらず、あくまで様式と図像を根拠にして考察する際つきものの曖昧な結論を下したにすぎないといえる。

今までのところ、SLCおよびSAについて最も徹底した論述を行ったのはキニーである。²⁸⁾キニーは絶対年代を決定するために、四葉型プランの建築史的研究所とSAモザイクの様式分析という、曖昧な結論しか得られない従来の脆弱な方法を放棄する。クラインバウアーの先行研究をもとに、煉瓦工法の観察、土台の石材の出所、聖堂と宮廷の関係の3点にのみに絞って考察を行ったのである。つまり、SL、SI、SAはアンブロシウスの司教叙階以前の、より高価な工法で建設されており、土台には付近の存在した円形劇場の部材の切り石を約6000個再利用する。この石の運搬や豪華な内部装飾の費用は一教区の経済的限度を超える。またfastigiumと呼ばれる中央のアーチの取り付けられたプロピラエウムが皇帝用であること、また宮廷の至近距離に位置すること、四葉型プランとは宮廷礼拝堂に好んで採用されたことから、SLをミラノの宮廷附属聖堂バシリカ・ポルティアーナとする。この名称は城門（ポルタ）から近いという地理条件から命名された、という独自の説をここではじめて提示している。文献に一切現われないのは、アリウス派に対するいわば「記憶の抹消」のための措置である。SLは城壁の外側という埋葬にふさわしい場所に位置し、従ってSAは、皇族用霊廟所である。アンブロシウスの司教叙階以前の工法は6世紀に再び使用されるが、首都がラヴェンナに移転した402年以降に、豪華な聖堂がミ

ラノの、それも蛮族の侵入に脅かされる城壁の外に造られるとは考え難いとする。また、円形劇場での行列を好んだスティリコの時代(398-408)にわざわざ円形劇場を解体して聖堂を建設することもなかったであろう。従って、SLは親アリウス派皇帝コンスタンティウス帝(337-361)の命により、アリウス派司教アウクセンティウスの時代(355-374)に完成された。この皇帝は全ての四葉型プランの宮廷礼拝堂の原型となった、アンティオキアの黄金八角堂の完成(コンスタンティヌス大帝によって開始された)を監督している。このキニーの結論については、スポンサーの問題に幾分仮説的な要素が残るものの、その論旨の大筋に従わざるを得ないように思われる。

一方、ルイスは、SLC²⁹⁾が宮廷附属聖堂であるという大方の意見に従うが、建築年代をテオドシウス帝時代であると考えている。年代決定に関するクラインバウアーおよびキニーへの反論として、異なる壁体の造りを、年代の差ではなく、異なる工房(*corporati civitatis Mediolanensis*は宮廷お抱えの建築家集団であって、遷都とともにラヴェンナに移動したのに対し、*collegati*と*artifices*はより安価な地元の商業的建築に従事した)に帰しているのである。ラヴェンナのガラ・ブラキディア廟の壁体とミラノのSLの壁体と同じモドゥロを示すのは、まさしくこの理由による。また、アリウス派アウクセンティウス司教創建説への反論として、次のように論証する。すなわち、バシリカ・ポルティアーナとは、Portiusという人物に由来する名義聖堂(*titulus*)であったという11世紀の文献の記述を信頼する。またアンブロシウスの書簡(XX, 19)の記述から、ポルティアーナが規模の小さい聖堂であったことを想定し、壮大なSLCはふさわしくないと考えるのである。さらに、16世紀の記述にあるように、SLとSAはアンブロシウスによって「和解された」というのは、アリウス派から正統への回帰を意味するのではなく、異教神殿からキリスト教聖堂への回宗を意味すると解釈する。実際、13世紀および16世紀の文献中SLCはマクシミアヌス帝によって建てられたヘラクレス神殿および浴場であったとの記事がある。さら

に、アウクセンティウスは既存の聖堂を占拠しただけで、新しい建築事業は行わなかったとする。この点でトゥールのグレゴリウスの言葉（“Ecclesiae parietum ne minius sit amor. . . . Unum moneo : cavete antichristum : male enim vos parietum amor cepit, male Ecclesiam Dei in tectis aedificiisque veneramini, male sub his pacis nomen ingeritis. . . .” *Contra Arianos*, 12, P. L. X, col. 616）に、いくつかの聖堂の建立を想像したキニーと全く異なる解釈を下している。SLC の創建者については、9 世紀から17世紀までの文献中、多くがガラ・プラキディアあるいは、テオドシウス帝とするのに対し、司教創建とする文献が皆無であることを指摘する。宮廷からの至近距離、プロピラエウムがテオドシウス朝においても皇帝の印であったこと（有名なテオドシウス帝のミソリウムの背景にも表される）、最大級の規模のアトリウム、集中式プラン、宮殿の目印としての塔などの、先立ってテッサロニキのテオドシウス帝によって改修されたハギオス・ゲオルギオス聖堂と共通する要素から、SLC がテオドシウス帝の宮廷附属聖堂であったことを主張する。いずれにせよ原型となるのは、アンティオキアの黄金八角堂である。また、ルイスはSL との軸線上に位置するSI の重要性に初めて着眼した。十字架を内包する八角型プランのSI もまたモザイクなどの豪華な内装が施されていた。これはルイスによるとイエルサレムのアナスタシスを模した殉教者礼拝堂であり、4 世紀末にはここに聖ラウレンティウスの聖遺物が安置されていたのだ、という仮説を提出する。また、SL 本体は聖ラウレンティウスと救世主に捧げられていたとする。しかし、これらの根拠は提示されないままである。ローマの聖人である聖ラウレンティウスの崇敬はアンブロシウスによってミラノに導入されたが、同じスペイン出身であるテオドシウス帝によってもことさらの帰依を受けていたのである。一方、SA はアンフォラを使用した天井の工法、モザイクの技法と様式から、SL およびSI の建設（389-391）より10年ほど遅れ、ガラ・プラキディアにより、423-450年頃、伝説にあるように、自身のため、あるいは子供達のために造られた霊廟所

であるとする。忘れられていた SI の意義を見直した功績は大きく、また、SLC の規模はテオドシウス帝の創建にふさわしいように思えるのであるが、全体として文献記述に重きを置くため、仮説的な要素が多い。また 6 世紀の事実から 4 世紀の出来事を推測しており、脆弱な議論の展開に終わっているといえる。

クラウトハイマー³⁰⁾はバシリカ・ポルティアーナ説を支持し、SL、SI、SA は、376/377年にグラティアヌス帝によって建設開始され、378年に同時に完成されたと考えた。すなわち、壮大で豪華な SLC は宮廷附属礼拝堂以外ではありえないのであって、建設時期としてはミラノに宮廷の存在した、340-402年に限定される。同時にアウソニウスによるミラノの記述 (*Ordo urbium nobilium*, *LCL*, I: 272) に石材を供給した円形劇場がすでに記載されていないことから、380年代以前の建設と考える。また、コンスタンティノポリスとローマに各々霊廟所を準備したテオドシウスとホノリウスの時代は除外する。さらに、宮廷を巻き込んでのニケーア派と反ニケーア派の長引いた闘争を考慮して、バシリカ・ポルティアーナがとるに足らない規模と内容の聖堂であるはずはないという結論にいたる。従って規模の大きな聖堂が、跡形もなく消え去ったとは考えにくいと推測する。また、「城壁の外」というアンブロシウスの言葉に着目すると、初期キリスト教時代の聖堂で城壁の外側に造られたのは、アンブロシウスの創建によるものを除外すると SLC のみである。造営の時期については、アウクセンティウス時代とするより、アリウス派が切実に自分達の聖堂を必要とした、アンブロシウス司教在任時代であると考ええる。実際アンブロシウスはニケーア派の司教として、精力的に異端を糾弾し続けたのである。グラティアヌス帝は妻フラヴィア・マクシマ・コンスタンティーナおよび継母ユスティーナの影響のもと、異端の礼拝に対する寛容令を378年に発令する。明らかに皇族用の霊廟所である SA はおそらくヴァレンティアーヌス帝の亡骸がコンスタンティノポリスに運ばれた375年あるいは376年初頭には、まだ計画されていなかったと考える方が自然であり、376年以降に造られ、378年に押収された。城壁の

外側は4世紀においては異端の礼拝のための場所であり、SLCはその立地条件を満たしている。SIについては、5世紀半ば以降ミラノ司教の霊廟所として機能した事実から推しはかるに、アリウス派司教アウクセンティウスの遅れて造られた霊廟所であった可能性を示唆するにとどめる。

主だった論文について今まで再検討してきた。³¹⁾今までの研究から、次のことを事実として議論をはじめることができるだろう。すなわち、SLCは明らかに宮廷附属聖堂としての条件を備えており、アリウス派と正統派の闘争の中心となったバシリカ・ポルティアーナである、ということである。また、SL本堂の四葉型プランの原型となったのは、現存しないアンティオキアの黄金八角堂であるということについてもすでに多くの研究者から指摘されている通りである。

建築の時期については、アリウス派司教アウクセンティウス時代(355-374)か、あるいは、クラウトハイマーに従って、378年とするのか、という2説に分かれる。いずれにしてもSAモザイクは現存する地上の聖堂モザイク装飾の中でも最古の部類に属する作品である。また、八角堂コンクのモザイクの画面構成や図像がローマ・カタコンベ壁画のそれと対応する点も興味深い。このように考えると、SAのモザイクは慎ましい地下の葬祭美術から、地上のモニュメンタルなアプシス構成への橋渡しをする作品として、その重要性を増してくる。また、部分的にはあれ、前室と八角堂本体の両方のモザイクが伝わっており、聖堂装飾プログラムを考える上で非常に貴重な例となっているのである。

ローマ教皇ダマスス(在位366-384)は、聖遺物崇敬儀礼を嫌ったアリウス派³²⁾に対抗するために、殉教者に対する儀礼の組織化し、盛り立てる政策にでる。ダマススはローマのカタコンベに埋葬された、おもだった殉教聖人の伝記を韻文にし、年代記作者フィロカルスに古典的な美しい字体でモニュメンタルな大理石の板に刻ませ、彼等の墓の上に置く。このようにして、キリスト教世界全体から押し寄せる巡礼者によって、聖人崇敬儀礼はひろく波及していく。

ミラノの司教アンブロシウスもアリウス派對策として、ゲルヴァシウスとプロタシウスという二人の聖人の遺骨を発見したことを機に、聖人崇敬儀礼を利用する方針に転向するのである。

筆者の考えでは、SLC は、親アリウス派皇帝の時代に、宮廷礼拝堂として建てられたように思われる。SI はいずれにせよ、アウクセンティウスの墓所として計画されたのであろう。そののち、この聖堂は正統派に奪還されて、回宗する。その際にアンブロシウスによって、聖ラウレンティウスの崇敬が導入されたのであろうか。

おわりに

実際にアンブロシウスはアリウス派の異端の排斥を行いながら、西方教会における皇帝勢力の無力化をはかり、それに成功したのだといえる。そのような事件の背景となったバシリカ・ポルティアーナに対して、アリウス派と皇帝による教会介入という忌まわしい記憶の抹消のために、創建のエピソードは意識的に排除されたのであった。SL がバシリカ・ポルティアーナであるとするならば、今までなされてきたような、アンブロシウスの著作を引用しての作品解釈の影はうすくなることであろう。また、SA の壁面を飾るモザイクには、あるいはアリウス主義にまつわる時代的要素が見い出される可能性も考えられる。このような結果を踏まえて、SA 前室と八角堂に一貫する図像プログラムについて再考する必要があるように思われる。

年表

355	アウクセンティウス、ミラノ司教に叙階（－374）
374	アンブロシウス、ミラノ司教に叙階（－397）
378	アリウス派信徒、聖堂を占拠
379	グラティアヌス帝、聖堂を正統派に返還
383	グラティアヌス帝暗殺、親アリウス派ヴァレンティニアヌス二世即位

- 384 アリウス派司教メルクリウス、テオドシウス帝により追放され、ミラノの
 宮廷へ亡命、ミラノ司教アウクセンティウス二世として叙階
 385 アンブロシウスに対する、アリウス派への聖堂引き渡し勧告
 386 1月23日、ヴァレンティニアヌス二世によりアリウス派への集会許可令
 発布復活際、皇帝により正統派に対してバシリカ・ポルティアーナ引き渡
 し要求、軍隊により聖堂包囲、アリウス派＝皇帝軍の敗退

文献資料に記述されたサン・ロレンツォ・マッジョーレ聖堂

513年以前 6. *versus in basilica sancti Xysti facti et scripti quam Lavrentius epis-*
copus fecit :

Antistes genio pollens probitate pudore
 Ornauit donum meritis et lumina uitae
 Ad pretium iugens operis haec templa locauit
 Lapsa per incertos non spargit fama recessus ;
 Sed ueteris facti uiuit lex aucta per aeuum
 Cum dexter capiat Laurenti munera Xystus.
 Sic manet officium, quod sanctis contigit olim.
 Obtulit hic templum, ueniens quod consecret ille.
 (*Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum*, VI, *Magni Felicis Ennodii*
Opera Omnia, ed. G. Hartel, 1882, Carmina II, VIII, pp. 559-560.)

8 世紀 *Versum de Mediolano Ciuitate, :*

Gloriae sacris micat ornata ecclesiis,
 ex quibus alma est Laurenti intus alavariis
 lapidibus auroque tecta, aedita in turribus.
 (*Monumenta Germaniae Historica, Poetae latini aevi carolini*, I, ed. E.
 Duemmler, 1881, p. 25)

9 世紀 *Vita Sancti Veranii (Cavallicensis) :*

“Unde per singulas civitates evectionibus a sanctis episcopis cum
 charitate praestitis Mediolanum usque pervenit, ubi cum sancti martyr-
 is Laurentii festivitate teneretur, inibi enim Galla Placidia
 Uxor quondam Zenonis (imo Constantii) imperatoris in honore ejus-
 dem martyris donum mirificam construxit, quae sua pulchritudine
 universa pene aedificia superat Italiae.”

(*Acta Sanctorum. Octobris*, VIII, 1869, 468, 12)

- 14世紀 Goffredo da Bussero ;
 “de primo genexio dicto. mirabiliter scripsi. in libro ticinensis. ubi de
 ystrionibus et de aurea ecclesia genesii multa narraui”
 (Magistretti-Monneret, *Liber notitiae sanctorum Mediolani*, col. 144C.)

Galvaneus Fiamma, *Chronicon Extravagans de antiquitatibus Mediolani*.
 SA について ; “porphyriticis lapidibus et opere mosayco contexta”

ibid., *Chronicon maius* :

“In loco ubi nunc dicitur ecclesia sancti Laurentii, imperator Maximianus ad honorem dei Herculis....construxerunt fanum rotundum....” (“In processu temporis quedam regina dicta galla Patritia que) in latere istius ecclesiae construxit capellam rotundam...et dicitur capella reginae, ubi ipsa dormit.” “vesitivit parietes interius laminis marmoreis pretiosis”

- 1492 Guiliano da Sangallo,
 サン・ロレンツォ・マッジョーレ聖堂平面図中 SA 部分への書き込み :
 TVTO DI PORFIDO
 (Siena, Biblioteca comunale, tacinio senese, fol. 19.)

- 1674 Carlo Torre, *Il ritratto di Milano*, pp. 126-127
 “vecchiamente questa rotonda (S. Aquilino) era tutta fatta a ‘Pitture
 musaiche, ed io osseruai più volte sua Cupola in tal positura, tenendo
 anche tra ‘l’vn’ arco, e l’altro, lastre rotonde di marmi preziosi ; si
 rinnouo’ poscia alcuni anni sono, disfacendosi del tuto il musaico, e
 leuando le rotonde lastre, che parte seruirono per la Fabbrica dell
 ‘incominciato Santuario sull’ Altar Maggiore di San Lorenzo, ed incros-
 tossi, come voi vedete, il tutto di calcina bianca, ed a’lauorati stucchi in
 forma Corintia”

おもな参考文献

- 1940 Card. Schuster, I. *Sant 'Ambrogio e le più antiche basiliche milanesi*.
 1951 Calderini, A. Chierici, G. Cecchelli. C. *La Basilica di San Lorenzo*

Maggiore in Milano.

- 1957 Grabar, A. "Études citiques. 1. San Lorenzo de Milan ; Calderini, A. Chierici, G. Cecchelli. C. *La Basilica di San Lorenzo*, 1951. *Maggiore in Milano.*", *Cahiers archéologiques*, IX, pp. 345-348.
- 1961 Bovini, Giuseppe. "Il complesso monumentale di S. Lorenzo Maggiore a Milano", *Corsi di Cultura sull'Arte Ravennate e Bizantina*, VIII, pp. 119-139.
- 1964 Traversi, G. *Architettura paleocristiana milanese.*
- 1967 Kleinbauer, W. Eugene. "Some renaissance views of early christian and romanesque San Lorenzo in Milan", *Arte Lombarda*, XII, pp. 1-10.
- 1968 Kleinbauer, W. Eugene. "Toward a dating of San Lorenzo in Milan. Masonry and building method of milanese roman and early christian architecture", *Arte Lombarda*, pp. 1-22.
- 1969 Mirabella Roberti, M. *VIIIICAC, Barcelona*, pp. 127ff.
- 1970 Bovini, Giuseppe. "I mosaici del S. Aquilino di Milano", *Corsi di Cultura sull'Arte Ravennate e Bizantina*, XVII, pp. 61ff.
- 1970 Dassmann, E. "Das Apsismosaik von S. Pudenziana in Rom", *Römische Quartalschrift*, pp. 67-81.
- 1970/71 Kinney, D. "'Capella Reginae' : S. Aquilino in Milan", *Marsyas* 15, pp. 13-35.
- 1972 Kinney, D. "The evidence for the dating of S. Lorenzo in Milan", *Journal of Society of Architectural Historians*, XXXI, nr. 2, pp. 92-107.
- 1973 Lewis, S. "S. Lorenzo revisited. A Theodosian palace church at Milan", *Journal of Society of Architectural Historians*, XXXII, pp. 197-222.
- 1973 Picard, J. Ch. "Le quadriportique de Sait-Laurent de Milan", *Mélanges d'Archéologie et d'Histoire de l'Ecole Française de Rome, Antiquité*, LXXXV, pp. 695-708.
- 1976 Kleinbauer, W. Eugene. "'Aedita in turribus' : The superstructure of the early christian church of S. Lorenzo in Milan", *Gesta* XV/1, pp. 1-9.
- 1976(2) Wilpert, J. Schumacher, W. N. *Die römischen Mosaiken der kirchlichen Bauten vom IV.-XIII. Jahrhundert.*
- 1978 Nordhagen, P. J. "The technique of italian mosaics of the fourth and fifth century A.D." *Antichità Altoadriatiche*, XIII (*Aquileia e Ravenna.*), pp. 259-265.
- 1979 Cattaneo, E. "Il 'Sant' Aquilino' : battistero o mausoleo ?", *Paradoxos politeia (Studi patristici in onore di Giuseppe Lazzati).*

- 1982 Nordhagen, P. J. "The mosaics of the Cappella di S. Aquilino in Milan : Evidence of restoration", *Acta ad Archaeologiam et Artium Historiam Pertinentia* series altera II in 8o v. 2, pp. 77-94.
- 1983 Krautheimer, R. Three Christian Capitals.
- 1987 ed. Bertelli, C. *Il millennio ambrosiano, una capitale da Ambrogio ai Carolingi*.
- 1987/88 Krautheimer, R. "Congetture sui mosaici scomparsi di S. Sabina a Roma", *Rendiconti Pontificia Accademia* ,60, pp. 171-187.
- 1989 ed. Mori, A. C. *Le colonne di S. Lorenzo. Storia e restauro di un monumento romano*.
- 1989 Tolotti, F. "Mausoleo paleocristiano con vestibolo biapsidato" *Quaeritur Inventus Colitur*. (Miscellanea in onore di Padre U. Fasola), pp. 797-812.
- 1990 *Milano capitale di impero romano. 286-402 d. c.*
- 1992(2) Ihm, C. *Die Programme der christlichen Apsismalerei 4-8. Jahrhundert*.

註

1. KRAUTHEIMER, R. *Three Christian Capitals-Topography and Politics*, Univ. of California Press, 1982, pp. 66-92. *Milano capitale dell'impero romano*, 286-402 d. c. (展覧会カタログ: Milano-Palazzo Reale 24 gennaio-22 aprile 1990), 1990. 皇帝のミラノ滞在年表については、特に pp. 30-31参照のこと。
2. LE COLONNE DI S. LORENZO, 1989, p. 23.
3. cf. VITURVIUS, *De Architectura*, v. 6. 9. Baldwin SMITH, D. E. *Architectural Symbolism of Imperial Rome and the Middle Ages*, 1956, pp. 141.
4. LEWIS, 1973, p. 207. もっともルイスは、テオドシウス帝についてのこのようなアドヴェントゥス儀礼を考えている。
5. SLC 基礎の発掘について: Soprintendenza ai Monumenti della Lombardia, *Relazione introno alle ricerche ai ritrovamenti ed ai lavori fatti nella zona archeologica di San Lorenzo in Milano dall'ottobre 1910 al dicembre 1911, 1913*. Kinney, *Evidence*, pp. 98-103. *Milano Capitale*, pp. 138-139. 円形劇場の発掘の結果、劇場の壁体はほぼ一定の高さで切り取られており、その上にコンクリートが塗られていることが観察された。これは石材抜き取りが組織的であったことを物語る。cf. Kinney, *Evidence*, p. 98. Calderini, A. *L'Anfiteatro romano*, 1940.
6. PAULINUS, *Vita S. Ambrosii*, P. L. XIV, 34, c. 41-42. ここで、ホノリウスの第3期目の執政官就任を祝う見世物において、リビアで捕獲された猛獣との闘いか

ら解放された犯罪者 Cresconius についてのエピソードが記される。また、ミラノ滞在中の詩人クラウディアヌスは、399年に Flavius Manlius Theodorus の執政官就任を見込んだ祝祭行列が円形劇場で行われたことをあげている (*Panegiricus dictus Manlio Theodoro consuli*, 290-310)。

7. KINNEY, *The Evidence*, p. 100.
8. *Milano Capitale*, p. 139.
9. “Et Mediolani mira omnia, copia rerum, /innumerae cultaeque domus, facunda virorum/ingenia et mores laeti ; tum duplici muro/amplificata loci species populique voluptas/circus et inclusi moles cuneata theatri ; /templa Palatinae-que arces opulensque moneta/et regio Heraculei celebris sub honore lavacra ; /cunctaque marmoreis ornata peristyla signis/moeniaque in valli formam circumdata limbo : /omnia quae magnis operum velut aemula formis/excellent : nec iuncta premit vicinia Romae.” *Ausonius*, tr. H. G. EVELYN WHITE, (The Loeb Classical Library), 1, 1919, p. 272.
10. Calderini-Chierici-Cecchelli, pp. 5-6, 69-74, 78.
11. Calderini-Chierici-Cecchelli, pp. 67-82.
12. KRAUTHEIMER, *Three Christian Capitals*, p. 83.
13. KLEINBAUER, W. E. “Aedita in turribus”
14. KLEINBAUER は SL がグラティアヌス帝によるトリニアのパシリカのモデルとなったという可能性を考えている。“Aedita turribus”, p. 7.
15. KLEINBAUER, W. E. “Some renaissance views”, pp. 1-2.
16. KLEINBAUER, *Three Christian Capitals*, p. 83. *ibid.*, *Early Christian and Byzantine Architecture*, 1981, pp. 79-80, 81, 147, 241, 242. この建物は失われたが、文献上の記述 (エウセビオス, 「コンスタンティヌス伝」, 111, 50) やアンテリオキア郊外の別荘床モザイクに表された画像から再現しうる。
17. TOLOTTI, F. “Mausolei paleocristiani con vestibolo biapsidato”, *Quaeritur inventus colitur*, 1989, pp. 797-812.
18. cf. DOELGER, F. J. “Zur Symbolik des altchristlichen Taufhauses. I. Das Oktagon und die Symbolik der Achtzahl. Die Inschrift des hl. Ambrosiu im Baptisterium der Theklakirche von Mailand”, *Antike und Christentum*, Band IV, 1934, pp. 153-183. Quacquarelli, A. *L'ogdoade patristica e suoi riflessi nella liturgia e nei monumenti*, 1973.
19. M. G. H., *Scriptores rerum merovingicarum*, I, *Gregorii Turonensis Opera*, ed. W. ARNDT & BR. KRUSCH, 1885, pp. 518-519.
20. パヴィアの司教 Magnus Felix Ennodius, *Epigrammata*. の記述によると、サンシスト礼拝堂は511年から512年までには完成されていた。
21. SCHUSTER, Ildefonso. *Sant'Ambrogio e le più antiche basiliche milanesi*, 1940.

22. Calderini-Chierici-Cecchelli, *La Basilica di San Lorenzo Maggiore in Milano*, 1951.
23. 386年にヴァレンティアヌス帝が “Debeo et ego unam basilicam habere.” (Ambrosius *Epistola* XX 19, P. L. XVI, col. 1042) と要求したとき、バシリカポルティアーナはすでに存在したのだが、379年からアンプロシウス率いる正統派の所有になっていたから、と考えるのである。
24. GRABAR, A. CA, 1957, pp. 345-348.
25. TRAVERSI, G. *Architettura Paleocristiana Milanese*, 1964.
26. KLEINBAUER, W. E. “Toward a dating of San Lorenzo in Milan”, *Arte Lombarda*, XIII, 1968, pp. 1-22.
27. BOVINI, G. “I mosaici del S. Aquilino di Milano”, *Corsi di Cultura sull'Arte Ravennate e Bizantina*, XVII, pp. 61 ff.
28. KINNEY, D. “Capella Reginae”, *Marsyas*, 1970/71, pp. 13-35. ibid. “The evidence for the dating of S. Lorenzo in Milan”, *JSAH*, XXXI, pp. 197-222.
29. LEWIS, S. “San Lorenzo Revisited : A Theodosian palace Church at Milan”, *JSAH*, 1973, pp. 197-222.
30. KRAUTHEIMER, R. *Three Christian Capitals*, 1983, 1983, 特に pp. 68-92.
31. 1990年のパラッツォ・レアーレでの展覧会については、ミラノとほとんど関係のない地方の作品まで集められており、些か焦点が定まっていないという印象を受けた。同時代のミラノ建築についての網羅的な研究もされておらず、また、SLCについては先行研究を踏まえていない甚だ不完全なものであったので、ここでは特に取り上げない。cf. *Milano capitale dell'impero romano 286-402. d. c.*, 1990.
32. PIETRI, CH. “Concordia Apostolorum et Renovatio Urbis”, *MEFRA*, LXXIII, 1961, pp. 304-305.